

獄中の作（高杉晋作）

夜深く人定まつて四隣閑なり

短燭光は寒し破壁の間

無限の愁情無限の恨

君を思い父を思うて涙漕漕

夜深人定四隣閑 短燭光寒破壁間
無限愁情無限恨 思君思父涙漕漕

解説 この詩は深夜の獄中における君父を思う悲憤の情をのべたもの。元治元年、晋作二十六歳のとき、長州萩の野山の獄中で作られた。

語釈 ※四隣Ⅱ近隣、となり近所の意もあるが、ここではあたり、四辺の意。※短燭Ⅱたけの低い燭台。※漕漕Ⅱ涙のしたたるさま。

通釈 夜はしんしんと更けわたり、人はどうに寝静まつて、あたりは全くひっそりしている。一人起きている私の、この野山の獄の室内の壁は破れ損じ、それをまた淡々と丈低い燭台の灯火が照らしている。こうして獄舎に幽閉されていることは無限の愁いであり、恨んでも余りあることである。しかもわがご主君ご自身、勅命による勘当をこうむる身、わが父として藩の為にどれほどか心労しておられるであろうに。主君のこと、父上のこと、あれこれ思えば涙がとめどなくあふれ流れて止まないものである。